日本味と匂学会第 59 回大会開催記

2025 年度の日本味と匂学会第 59 回大会は、2025 年 9 月 8 日（月）から 10 日（水）の会期において 395 名の参加者をお迎えし、大阪大学豊中キャンパスの大阪大学会館にて開催されました。その開催にあたりご尽力くださりました大会組織委員の先生方、学会事務局、ならびに大会運営スタッフの方々には、改めまして厚く御礼申し上げます。また、大会運営の趣旨にご賛同くださり、ご協賛、企業展示、ご寄付をくださりました企業･団体の皆様方にも謹んで感謝を申し上げます。本大会の開催・運営は、主に大阪大学人間科学研究科行動生理学分野のスタッフを中心に準備してまいりましたが、大過なく何とか大会を開催し、終了できましたことに安堵しております。個人的には準備期間中に一時的な難聴を経験したりと浮き沈みが多々ありましたが、大阪大学の学内外の先生方・学生の皆様からの温かいお力添えのおかげをもちまして、大会を終えることができました。心からの感謝を申し上げます。

大会準備について

先ず、第 59 回大会の開催をお引き受けした後、一番最初に考えましたのはどの会場にて大阪大会を開催すべきかということでした。過去の大阪大会では、山本隆先生が大阪城を眺めることができる好立地の KKR ホテル大阪にて開催なされ、脇坂先生が大阪大学吹田キャンパスのコンベンションセンターにて実施なされました。物価高騰から、学外の施設利用料は高いため、学内施設に候補先を絞りました。大阪大学には大阪市中心部の中之島というアクセス便利な立地に、2023 年にリニューアルされた中之島センターがございます。同センターはアクセスの良さから全国からの参加者の皆様方をお迎えするには適した施設ではありますが、利用料が少々割高なため収入面からはその利用は不安でした。吹田のコンベンションセンターか中之島センターかと悩んでおりました折、同じ部局内の他研究室の先生が 300 名規模の学会を豊中キャンパスの大阪大学会館にて実施されたとお聞きしました。大阪大学会館ではメインホールでの講演とともに、ポスター発表も同施設内の他のホールで可能とも教えていただき、大阪大学会館が候補に踊り出ました。調べてみると、私自身が助手の頃、学生実験のために訪れていたイ号館が改装され、大阪大学会館として生まれ変わったと知りました。当時はエアコンもなく、暑い中の窓を開けて学生実習を行ったという苦労話を思い出す場所です。さらに、もっと調べてみたところ、大阪大学の前身の一つである旧浪花高校の校舎であったという由緒ある歴史的建造物であるとも分かりました。大阪大学会館のメインホールはコンベンションセンターの MO ホールや中之島センターの佐治敬三ホールなどと比べると、少々手狭かなという印象を持っておりました。ただ、前々回の廣田先生がご担当された東京大会や吉田先生がご尽力された岡山大会などで、対面での学術交流の良さを再認識しておりましたので、コンパクトな会場にて参加者の皆様方がより密に交流できることも良いのだろうと考え直し、大阪大学会館での開催を決めました。運営委員会から私の所属先である本学人間科学研究科との共催をお許しいただいた結果、施設利用料を引き下げることにも成功したため、開催に向けてリーズナブルに会場を確保できました。

次に悩んだのは、やはり開催に必要となる経費です。前年度大会長の吉田先生からは、自前で集めるべき予算額をご教示いただいておりました。問題はその金額をどのように集めればいいのかでした。吉田先生からは、前々回の廣田先生が集められた経費の一覧資料もいただいておりましたので、それを参考にして郵送作戦・メール作戦を開始しました。とはいえ、伝手も面識もない私どもからの依頼書が果たして役に立つのかどうかは全く分かりませんでした。ただ、何もしないままでは何も得られないので、お願いするのはタダという関西人根性丸出しで進めることにしました（大阪に長く住んでいますので、言うのはタダという心情になっております）。宛名は手書きとして、それなりに時間も労力もかけましたが、思うようには集まらないものです。ご返信すらないことが大半でした。中には、経費の面からご協賛は無理であることを丁寧にご連絡くださる企業もありました。思うほどには経費が集まらず、開催費用の支払いができるのかどうかは甚だ不安な毎日でした。ただ、捨てる神あれば拾う神ありということで、思いもよらない企業様からのご協賛を賜ることも複数ありました。それぞれの協賛金にはこれまで思いもしなかった重さがあることを痛感しております。研究においては、財団等の団体様からの研究助成は金額以上の価値があるとしばしばお聞きします。学会開催においては、企業・財団法人様からのご協賛には、確かに額面以上の価値があることを再認識し、そのありがたさを実感する日々でもありました。

次に悩んだのは、海外から招聘する研究者の方です。

どなたが良いのかです。大阪大会は、大会長の裁量で食に関連するテーマのシンポジウムを多く揃えましたので、海外からの研究者も当然そのテーマに合致した候補者を 2 名考えました。山本隆先生が開催をご担当された大会では、当時の味覚・食行動研究の大家のお一人でいらした Ralph Norgren 先生をお招きされました。そこで、Norgren 先生とのつながりという点から、フロリダ州立大学の Alan Spector 先生をお呼びすることにしました。Alan 先生は私が初めてお会いした海外の味覚研究者でした。1993 年に札幌で開催された ISOT に Alan 先生がご来日され、山本先生が大阪大学に Alan 先生をお招きなさったときに初めてお会いしたのです。その当時の写真を Alan 先生は大事にお持ちになられており、この度、当時のことをお話する折にご分与くださりました。私は 1995 年の阪神淡路大震災で被災したので、その頃の写真の多くを失いました。そのため、Alan 先生からいただいた写真は当時を思い出させてくれる素晴らしいものとなりました。さらに、Alan 先生と私共の研究室とのつながりはそれだけではありません。当ラボにて長く助教を務められ、味覚研究にご尽力くださっていた乾賢先生と奥様の乾千珠子先生が、少し前まで Alan 先生のラボのポストドクとしてご活躍されていたのです。乾賢・千珠子両先生は本学会にて毎年ご発表されていらっしゃるので、お二人が本大会にご参加されれば Alan 先生も安心して大会にご参加くださると考えました。予想通り、Alan 先生は非常にリラックスしてご参加くださり、その特別講演では動物での胃バイパスの食行動への効果の検討という長く手間暇がかかるテーマの内容をご発表くださり、地道な努力の大切さを改めて示してくださりました。Alan 先生には、この場をお借りして感謝申し上げたく思います。

Alan Spector 先生（フロリダ州立大学教授）

大会プログラムについて

第 59 回大会では、食に関わる味覚・嗅覚をテーマに取り上げ、その関連するシンポジウムができればうれしいと考えておりました。ただし、従来の味覚・嗅覚シンポジウムについては、オーガナイザーの先生方をまずは決め、大まかな狙いをお願いはしつつも、その内容はお任せするという方針といたしました。このような無理難題を快くお引き受けくださった京都大学の林由佳子先生、産業技術総合研究所の小早川達先生には深く感謝申し上げます。林先生は三重大学の小林正佳先生とともにオーガナイザーとして、東京大学の西嶌大宣先生や小林先生からの臨床医学からの嗅覚研究、京都大学の今井啓雄先生からのサルの味覚研究、林先生のマウスとヒトでの高齢化と味覚の研究と、幅広いテーマを含む化学感覚のシンポジウムを企画・運営くださりました。普段は拝見できない鼻腔内部の動画を見ることができ、とても興味深く感じました。

西嶌大宣先生（東京大学）

今井啓雄先生（京都大学）

林由佳子先生（京都大学）

小林正佳先生（三重大学）

小早川先生にはゼンショーホールディングスの永井元先生とともに「双香路：O と R の邂逅」という副題のシンポジウム５を企画いただきました。広島修道大学の今田純雄先生からレトロネーザルアロマの研究の先駆けとなった Paul Rozin 先生の話を伺うことができました。立命館大学の和田有史先生からは、嗅覚と呼吸との関連性の研究が発表されました。東京大学の近藤健二先生からはヒト鼻腔内の気流解析という斬新な研究成果が発表されました。最後に名古屋大学の塩谷和基先生から風味知覚の神経メカニズムについて興味深い発表がありました。

若手シンポジウムでは、福井大学の村田先生と味の素株式会社の北島先生のご尽力によって、九州大学の田中 充先生、大阪大学の森山さくら先生、日本女子大学の中北智哉先生の３名の先生方がご登壇くださり、それぞれの先生方から風味可視化への最先端フードテック、嗅覚受容体と温度感受性チャネル TRPV1 のクロストーク、甘味受容体での調節物質の作用機構という先端的な内容がご発表され、科学の進歩を実感しました。

村田先生（福井大学）・北島博士（味の素株式会社）

近藤健二先生（東京大学）

和田有史先生（立命館大学）

小早川　達先生（産業技術総合研究所）

今田純雄先生（広島修道大学）

アジア国際シンポジウムでは、東京大学の竹内春樹先生のお力をお借りして、オーガナイザーを東京大学の香取先生と大阪大学の小澤先生にお願いすることができました。香取・小澤両先生からのご提案で、National University of Singapore の Dr. Haosheng Shen、Xuzhou Medical College の Dr. Dejuan Wang、Seoul National Univ の Dr. Sung-Yon Kim という世界で活躍中の若手研究者をお招きすることができました。これらのアジアの若手研究者方の世界的な先端研究に触れ、驚きと学びを得ることができました。

香取先生（東京大学）・小澤先生（大阪大学）

初日の最後を飾るシンポジウム３では、イギリスのリード大学から子どもの野菜摂食の研究をなさっている Marion Hetherington 教授のご発表を伺うことができました。立命館大学の和田有史先生から第 59 回大会の開催期間中に Marion 先生がご来日されることを伺いましたので、和田先生を通じて Marion 先生に大阪でのご講演をお願いし、ご快諾いただけました。せっかくですので、Marion 先生を中心として苦味と食に関するシンポジウムを企画しました。そこで、これまでご口演の機会がなかった企業研究者の方にもご登壇いただくのが良いのではと考え、苦味・野菜に関する企業研究を探したところ、和田先生からカゴメ株式会社の飛石さん･鈴木さんをご紹介いただきました。早速、お願いしたところ、ご登壇をご快諾くださりました。最後はもうお一人､分子や生物学からの苦味研究です。そこで、東原先生にもアドバイスをいただき、大阪大学の糸井川壮大先生にお願いすることができました。シンポジウム３はアカデミア・企業研究者からご発表があり、ヒト幼児の食嗜好や苦味分子進化と多様なレベルでの内容となり､とても面白いものとなりました。

シンポジウム３での総合討議：左より飛石氏（立命館大学・カゴメ株式会社）、Hetherington 教授（Leeds 大学）、糸井川先生（大阪大学）

常々、学会ではポスター会場にて深い議論ができることを楽しみにしておりましたが、大会運営側ということもあり、ポスター発表は１つ程度しか聞くことができませんでした。ただ、例年通り、活気にあふれたポスター討論が２日目・３日目に行われたようで、とてもうれしく思います。ご参加いただいた方からも、ポスター発表が極めて活発ですねとお聞きでき、安堵しております。

大会運営について

運営では人手が無ければ、全く進まないことをしみじみと感じました。受付やクローク、会場の照明やアナウンスなど、プログラムの進行を支える裏方業務の多さに驚くとともに、その人員確保に不安がありました。そこで、京都大学の林由佳子先生、本学の蛋白質研究所の山下敦子先生､朝日大学歯学部の硲哲崇先生、近畿大学の近藤高史先生､神戸大学の藍原祥子先生に、それぞれのラボの教員の先生方・学生の皆様に運営へご協力をお願いいたしました。運よく、これらのラボからの多くの学生がご協力くださりましたので、すべての担当には余裕をもって人員配置を行うことができ、大会期間中は不足なくプログラムを進めることができました。また、大会を裏で支えてくださった株式会社インターグループのご担当者様にも深く御礼申します。

運営面ではいくつか課題がありました。一つはポスター会場の広さです。当初、ポスター会場では、企業展示を６つほど受け付けるつもりでおりましたが、ありがたいことに、想定の倍以上の 15 企業・団体の皆様が展示にご応募くださりました。そのため、ポスター会場が手狭となってしまいました。企業展示を別会場で行うことも考えましたが、参加者の動線に近くなけ

れば展示広告の意味が低下してしまうので、企業展示とポスター発表を同一会場で行えるようにパッケージしていただきました。その分、ポスター発表での左右が詰まってしまい、発表者や討論を聞きに来られた参加者の皆様には狭い空間での発表・討論を強いてしまいました。この点は何か対策を考えるべきであったと反省しております。もう一つは会場の立地です。大阪大学会館は、本学豊中キャンパスの最も西にあります。そのため、アクセスの一つである大阪モノレール・柴原阪大前駅からは歩いて 15 分程度かかり、西からのアクセスである阪急宝塚線・石橋阪大前駅からも徒歩約 15 分となります。会期中は、参加者の皆様には残暑厳しい中での徒歩アクセスを強いてしまいました。この点も会期を 10 月にするべきかもしれませんでしたが、10 月に入ると大学も講義等があり、なかなか開催が難しいのです。また、会期は他学会との重複を避けての日程としましたが、一部の先生方には複数学会の連続出張となったと伺っており、とてもご苦労をおかけしてしまいました。ただ、複数の他学会との調整の末の会期決定でしたので、その点、どうかご寛恕いただければ幸いです。

最後に

先ず、日本味と匂学会学会賞を受賞された廣田順二先生、同じく功労賞を受賞された横須賀誠先生、研究奨励賞を受賞された福谷洋介先生、誠におめでとうございます。先生方の益々のご活躍をお祈りいたします。

左より、福谷洋介先生（研究奨励賞受賞）、横須賀誠先生（功労賞受賞）、廣田順二先生（学会賞受賞）、東原和成学会長

さて、本学会に私自身が初めて参加したのが、1994 年に熊本で開催された第 28 回味と匂のシンポジウム（当時）です。そして、味と匂学会を知ったのは東北大学で嶋田一郎先生のラボに出入りしていた頃（1987 年）ですので、約 38 年が経ちました。まさか、その味と匂学会第 59 回大会を自分が担当になって運営するとは思いもよらず、時の流れを感じております。嶋田先生のラボでニクバエの感覚毛の電気的味覚応答やショウジョウバエの味覚探索行動のデータを取っていた頃を思い出しますと、現在の化学感覚の進歩を実感します。当時から嶋田研究室でハエを研究されていた上野耕平先生（東京都医学総合研究所）のグループが、つい最近、当時のデータをきっかけとする味覚記憶に関する論文（1）を公刊されました。上野先生らの論文から、諦めずに取り組んでいれば成果として結実することを教えていただいた次第です。同様に第 59 回大会でご発表くだった内容が、いずれは成果として世に公刊され、次の化学感覚研究の礎となるものと確信し、その発展を祈ってやみません。第 59 回大会にご参加くだった方々、ご協力くださった皆様、ご協賛・ご支援くださった皆様方に重ねて御礼申し上げます。

引用文献

１） Martinez-Cordera, M., Sakai, T., Saitoe, M. et al. Molecular Brain (2025) 18:32

大会運営にご協力くださった行動生理学研究室の学生の皆さん（向かって一番左は当ラボの松井 大助教）

第 59 回大会　大会長　八十島　安伸
（大阪大学大学院人間科学研究科行動生理学研究分野）